エリーニ ニューズレター vol.10

10号　2016（平成28年）7月 発行

エリーニ ユネスコ協会
大阪市中央区備後町3-6-2 KFセンタービル Tel.06-6264-4455

第15回なにわ歴史シンポジウム
上町台地未来遺産フェスタ

《テーマ》
まぼろしの豊臣大坂城をしのんで
—大坂の陣４００年—

開催日　平成27年12月12日（日）
場　所　大阪歴史博物館

■ 基調講演　内容 ■

「豊臣家と豊臣秀頼の政治的位置」
帝塚山大学教授　笠谷 和比古 氏

歴史的に徳川家と豊臣家の対立軸で語られているが、実際は石田光成と徳川家康の対立構造が中心であって、豊臣家と徳川家という視点はなかった。そのため関が原の戦いの後の領地配分を見ると、西は決して徳川の領地ではなく、東だけを徳川家で領地を抑えていた。この構造は鎌倉時代から続いており、それが日本を治めていく構造であった。

「まぼろしの豊臣大坂城を掘りおこす」
前大阪文化財研究所学芸員　黒田 慶一 氏

第一期本丸工事、第二期二の丸工事、第三期惣構え工事、第四期新たな城壁長さ三里をめぐらして難攻不落の城を築くという視点から講演をされた。

「歌舞伎・文楽からみた大坂の陣」
演劇総合プロデューサー　河内 厚郎 氏

大坂の陣の記憶が世人の心に生きていた一八世紀、演劇界では鎌倉時代に仮託した脚色が流行。『近江源氏先陣館』『太平頭の飾』『鎌倉三代記』『佐々木高綱式勇記』『花飾三代記』などの大阪軍記が人気を博した。

■パネルディスカッション■

まぼろしの豊臣大坂城をしのんで

河内氏がコーディネーター役を努められ、日本近世の観点から大阪の陣を語られ、黒田氏は城郭史家として大坂城や大阪城下を発掘した観点から発言され、河内氏はコーディネーター役をしながら、大坂の陣を題材とした歌舞伎や文楽から見た身近な大坂城を語っていただいた。（長谷川惠一）

■エリーニ・ユネスコ協会とは・・・

1994年12月・・・創立
1995年　2月・・・日本ユネスコ協会連盟から承認

エリーニ・ユネスコ協会は、大阪の上町台地が日本で最も古くから開けた町であることに着目し、歴史シンポジウムや歴史ウォークを開催し、上町台地を世界に発信することを目指しています。

また「ESDの研究会とユネスコスクールの普及」に取り組み、子どもたちの学びが豊かになるよう活動しています。

エリーニとはギリシャ語で「平和」を意味します。

U's（青年部）は学校や地域社会とコーディネートしながら、子どもたちが地域の良さに気付き、誇りをもつことのできるよう「地域から発信する」活動を展開しています。

年会費
- ■個人会員…6,000円　■青年会員…3,000円
- ■家族会員…6,000円（個人会員のご家族のみ）
- ■維持会員（法人会員）…12,000円（一口）

※例会や各種イベントは「会員による自由意志参加」を原則としており、拘束はありません。

まずは知ることから（申込の流れ）
STEP 1　興味を持ったら事務局までお電話を
STEP 2　例会や行事に１日会員として参加をしてみる
STEP 3　入会を申し込む（事務局局宛に申込書を送付）

「ユネスコ協会ESDパスポート体験発表会」報告

二〇一五年十二月二十六日、大阪国際交流センター（銀杏の間）で「ユネスコ協会ESDパスポート体験発表会」が開かれました。

「ESDパスポート」は、日本ユネスコ協会連盟がボランティア活動普及の目的でつくった手帳であり、ユネスコ協会経由でユネスコスクールに配布されています。生徒たちはボランティア活動のたびに1ボラン、2ボランとポイントをESDパスポートに集めます。三〇ボランに達した生徒は、認定証を受け取ることができます。

発表会当日は、北摂つばさ高校、追手門学院中学高校、鶴見橋中学、春日丘高校、コリア国際学園中学高校、佐野高校、泉北高校、帝塚山学院泉ヶ丘高校、松原高校から数十人の生徒たちが集まり、日頃のボランティア活動について報告しました。東北被災地支援、スタディーツアーなどの海外交流、防災教育、地域清掃、保育園や老人ホームでのお手伝い、エコキャップ回収、平和学習、アジア学習など、多様なボランティア活動について報告があり、お互いに刺激を与え合いました。その後、数人ずつのグループに分かれ、ボランティアに関するワークショップもおこないました。

最後に、三〇ボランに達した生徒に対する認定証の授与がありました。プレゼンターは、大阪府ユネスコ連絡協議会の中馬弘毅会長でした。（岡　憲司）

私たちにもできる支援があります！

お知らせ『熊本地震　子ども支援募金』

4月14日に発生した熊本地震から4カ月を過ぎましたが、現地では未だ、安心できる環境とは言えません。

また被災した学校では授業の遅れ等が生じ、教育復興が必要となっています。そこで日本ユネスコ協会連盟では現地調査を行い、皆様から頂いた募金を、学校、学童保育所等への短期的な資金支援、中期的な子供達への学習支援に使わせて頂き、教育支援を行っていく予定です。

日本ユネスコ協会連盟　子ども支援募金口座

お振込先　郵便局
口座番号：００１６０－６－５７３４５８
口座名義：Ｕサポーターズ

報告　倒壊たブロック塀の撤去、草刈りといった作業を地元の方たちと会話を交わしながら動しみましたが、まだ復旧のメドが立てられない現状を目の当たりにしました。

あなたの書き損じはがきを ユネスコ世界寺子屋運動へ！

11枚の書き損じハガキで ひとりがひと月学校へ！

さまざまな理由で教育の機会にめぐまれない子どもや大人のために「学びの場＝寺子屋」を広げていきましょう！

エリーニ・ユネスコ★エコプロジェクト ペットボトルキャップ回収

ペットボトルキャップ回収によって貧困に苦しむ世界の子どもたちの支援活動に取り組んでいる団体に寄付しています。
支援にご協力お願いします。

※ペットボトルキャップ800個でワクチン1人分です。

■ 講演とシンポジウム ■　大阪府ユネスコ連絡協議会　東日本大震災復興支援事業

「２１世紀を生きる私たち」３・１１　いのちの尊厳、つながり

2016 2/21

基調講演
神津カンナ 氏

東日本大震災直.後からユネスコ・スクールの高校生を中心に.ユネスコ関係者が被災地支援活動に取り組み.現在も継続されている。3・11 五年後の今、この五年間の取り組みでの学びを参加者間で共有し、学びの体験を経験化し、これからのユネスコ活動に生かしていこうというのが目的。

作家でエッセイストの神津カンナさんを講師・司会に招いて，ユネスコ協会「ESDパスポート」震災支援ボランティア活動の参加している高校生たちと被災地ユネスコ活動支援活動の会員〈坂口一美 箕面ユ協会長〉らで楽しい、有益な学び会い（シンポジウム）のひと時を持ちました。

３・１１を忘れない

参加者の感想・反応

被災地支援の私たちがかえって被災地の人々から学ぶことが多いことに感銘をうけました。

3・11を風化させてはならないことを痛感させられた1日でした。

3・11と向き合うことが、いのちの尊重」というユネスコ精神を学ぶことと深くつながっていると考えさせられました。

被災地支援活動を、参加者だけの学びの体験だけに終わらせず、体験者皆で学びを共有、経験化し、体験者の学びを自己変革にどう発展させていくかのフォローアップの面で意義がありました。

成果・課題

こうした具体的なユネスコ活動の実践を広くリアルに市民に発表し共に考えていくプログラムは、市民のユネスコ活動への理解につながるので大切と痛感。

こうしたできるだけ多くの市民と共に考えたい企画は実施は設定の日程が大切。今回は2月という学校学年末になり高校生の参加が少なかったのが残念でした。

今後の展望

3・11から5年、3・11の風化が課題視されている現在、ユネスコ運動が「3・11を忘れない」取り組みと実践していきたいです。

（米田伸次）

■ シネマフューチャーセッション ■　歴史文化遺産の理解と保存の重要性について考える

日本ユネスコ協会連盟制作「雄勝法印神楽の復興」映画上映と同じ映画を見て語り合うシネマフューチャーセッション

2016 3/7・8

エリーニユネスコ協会Ｕｓ（青年部）×あべのハルカス近鉄本店　縁活事務局×関西フューチャーセンター　共催
協力：大阪府ユネスコ連絡協議会、國學院大學若木育成会大阪府支部

あべのハルカス近鉄本店
８階街ステーション

日本ユネスコ協会連盟は東日本大震災の文化復興の一環として宮城県石巻市雄勝町に600年以上にわたり伝えられた郷土芸能の復活に尽力しました。映画は復興に取り組む雄勝町の力強い姿だけでなく、法印神楽の魅力、雄勝の自然、日本人の持つ心や日本神話など様々な要素がとりいれられ、震災から復興へ向かう力強い姿を描いた作品です。手塚真監督より5年経った今だからこそ多くの人に観てほしいとのコメントや映画撮影時のエピソードなど（VTRで）おはなしいただきました。

参加者の感想反応

日本文化のキーワードが、神、人、自然、祭りの一体化であることが理解できました。その象徴としての東北神楽の復興にユネスコが取り組んでいることに感銘しました。

3・11が風化されようとしている今、「3・11を忘れない」ことの意味を改めて学ばせていただきました。

文化遺産を未来へつないでいくことの大切さを学ばせていただきました。是非、東北の文化遺産の復興に協力させていただきたいと思います。

東北を訪問してみたいです。

成果・課題

ユネスコが文化伝統遺産の保存に取り組んでいる具体的な活動を市民に理解していただき、ユネスコ活動に関心を持っていただく良い機会になりました。

単に、映画鑑賞だけにとどめず、ワークショップを導入したことによって理解を深めあうことができたのは良かったと思います。

今後の展望

私たちが日本文化を理解し、文化遺産の保存に取り組むことの大切さを学ぶ上でこの映画鑑賞を皆に提言したいです。

（米田伸次）

2015 2/7・8　第23回ワン・ワールド・フェスティバル

環境破壊、人権抑圧、民族紛争、難民、貧困など国際社会は大きな課題を抱え、それらは年々、深刻化しています。平和、人権、環境、貧困など、地球規模の課題は、それ自体が単独で存在しているのではなく、豊かさを享受している私たちの日々の生活や認識の仕方と深く関わり合っています。課題解決のためには、市民一人ひとりが自らの問題としてとらえ、考え、行動しなければなりません。そこで、市民に広く国際協力の大切さを認識してもらい、活動に参加してもらう機会を提供しようと、関西を中心に国際協力に携わっているNGO、国際機関、自治体、企業などが協力して、1993年から毎年、国際協力の催し「ワン・ワールド・フェスティバル」を

（1）地球規模の課題や地域社会の課題への市民の意識とライフスイルの変革の促進
（2）課題解決への市民の参加促進
（3）開発教育の促進
（4）ボランティア活動の促進
（5）異(多)文化理解の促進
（6）環境問題への意識の向上と活動の促進
（7）NGO／NPO間の連携・協働の促進
（8）NGO／NPOとODA実施機関の連携
（9）NGO／NPOと教育機関との連携・協働
（10）NGO／NPOと行政機関との連携・協働
（11）NGO／NPOと企業・済団体との連携・協働
（12）NGO／NPOの力量と意識の向上
（13）ネットワークの促進

を目的として開催しています。ワンフェスが「世界の中の日本」である事実を認識し、それに対する興味・関心を抱くきっかけ作りの場となり、多くの人が訪れるものになればと思います。（奥野祐樹）

「ユネスコ・ユース・ネット」として活動展示ブースの企画設営し、ユネスコ活動やU-comeの案内を来場者に行いました。

2016 3/20　U-come UNESCO communication meeting

3月20日名古屋にてU-come 2016が開催。社会問題に向き合い、自分で考え行動できるきっかけを目的とし、留学生を含む中学生から社会人までの72名が参加。今回の社会問題として、自然環境問題、インターネットと当事者意識、防災減災、相互理解とコミュニケーションを取り上げました。そして「平和」とは何なのか、そのために自分が何をできるのか考えました。（玉置友樹）

2015 11/14・15　ユネスコ青年研修キャンプ「COLER」

東京・若洲公園キャンプ場

ユネスコの青年会員たちが、まLGBT、生活保護、人種差別などなどの難しい問題に目をそらさず、まじめに楽しく、たくさんの『COLOR』に触れたキャンプでした。また、これをきっかけに、ユネスコ協会に入って活動し始めた人や大学のユネスコサークルとの交流につながったという声が聞かれ、本来の、「知識・交流を深め、今後のユネスコ活動の発展につなげる」という大きな目標を達成できたと感じました。（富澤明久）

2016 3/1～22　南北コリアと日本のともだち展 ハルカス展

南北コリアと日本のともだち展は、私たちの住む北東アジア地域の平和を願う催しです。大願民国・朝鮮民主義人民共和国・日本、在日コリアンの子ども達の絵をひとつの会場に展示して、絵でお互いを紹介しあい、わたしたちの間にある壁を乗り越える第一歩にします。今年のテーマ「私のおきにいり」の絵も東京や日本各地、ソウル・平壌・中国などをまわり、大阪の地元の子ども達にメッセージを添えて戻ってきました。

2015 8/2～5　第47回ユネスコ子どもキャンプ in千葉県立 内浦山県民の森

「心のピース一感じて、つなげてー」

このキャンプでは子どもたちと一緒に3泊4日、共同生活や自然とふれあうことで、自然や日常生活のありがたさ、人とのつながりなどを感じてもらいました。キャンプを通じてテーマにもあるpeace(平和)と仲間のピースをパズルのように組み合わせてユネスコの掲げるpeaceの輪をたくさん広げることができたと思います。このキャンプのために全国の青年会員が集まりキャンプは大盛り上がりでした。

子どもから大人まで一人一人が笑顔のピースでいっぱいのキャンプになったと思います。（富澤明久）

2016 2/12～15　南北コリアと日本のともだち展 東　京　展

今年は等身大の人型の絵が展示されましたが、装飾品や服装から様々な違いが見ることができて面白かったです。大学生の訪朝報告会では、過去の訪朝団との交流会もあり、年々国の変化していく様子を学ぶことができました。

子どもの絵の交流はもちろん支えるスタッフ側も繋がりができることは意義のあることだと思いました。（富澤明久）